
 □ 特 集 □

≪ シンポジウム ≫

う つ 病*

I 部 Pathogenie との関連における性格と状況

II 部 Schuldgefühl (罪責感)

司 会：新福 尚武 (慈恵医大教授)

副司会：宮本 忠雄 (医歯大助教授)

□ は じ め に □

このシンポジウムはうつ病について苦闘している若い研究者が日ごろの研究成果を出し合ったものである。幸いにも、問題領域はかきなり合いながら少しずつずれ、方法・立場は少しずつ相違しながら共通しているため、全体としてバリエーティに富み、しかも関連と統一のあるものとなった。

第 I 部は性格と状況であるが、問題をうつ病発生との関連における性格と状況にかぎった。したがって、一面からみるとうつ病の病前性格論であるが、他面からみると心理的発生論である。実際には両者は楯の両面にほかならない。長い間うつ病は単に「内因性」のものと考えられ、その面だけが注目されてきたが、さらにこのような面をもつということが明らかになつてきたことはうつ病研究史に新しいエポックを画するものといつてよいと思う。Tellenbach 教授の来日を機会として教授の Typus melancholicus と下田の執着性格の関係などが検討されたことは、とくに意義深いことであつた。

第 II 部は罪責感であるが、このテーマは二重の意味をもつ。一つは「罪責感」という人間存在のもつとも根本的な、もつとも深淵的なものが問題にされたという意味である。それは精神病理学プロパーにとつて重要な問題であるからである。もう一つは、わが国における罪責感

の問題、とくにその特殊性に関する検討という意味である。歴史、宗教、道德の相違がそれにどう影響するものか、うつ病の世界はどこでそれに接触するのか、われわれは深い関心をいだかざるをえない。

さて、シンポジウムの第 I 部は、うつ病がどうして起こってくるかということに焦点をおいて、性格、状況を考えるものであります。ところで、うつ病の起こりかたですが内因性という言葉どおりに、ある時期になると内因的なものが自然に出てきて、起こるのだというような考えは、こんにち、だれももたなくなつたと思います。しかし、どうして起こってくるかということについては、いろいろな考えがあるわけでありす。

それについて、内的なものを一応は認め、それをひき出すものとして「外から」加わるものを考えることができますが、その「外から」というのはその人間にまつた外因的なものという場合もありましようが、そうでない場合が多い。たとえば患者の性格とか、状況とかが問題になります。こんにちではそういうものとかかわり合いから、内的なものがひき出され、うつ病がだんだん発展していくという考えかたが、強くなつてきているのではないかと思います。

そういうふうにと考えると、これはうつ病だけでなく、いわゆる内因性精神病一般の起こりかたの一つのモデルを示すものだとも考えることができるのですが、それについてわれわれがどの程度研究しているか、あるいはどういう考えをもっているかということ述べあつて、今後の研究に対する刺激なり、ヒントなりを求めようというのが、このシンポジウムのねらいであります。

(新福尚武)

* 第 4 回日本精神病理・精神療法学会より

東京・都市センターホールにて